

## あの日を忘れない ～ボランティア活動を通して～

浅井 謙一 (50回生)

だんだんと日が経つに連れてあの惨事が忘れられていく、しかし被害に遭い、多くの友達や親戚の人などを亡くした人達はあの惨事を忘れることはないだろう。ぼくも絶対忘れたくない。

ボランティアに一度行った。行く途中、いろいろな光景を目にした。哀れ無惨だった。ある所では焼け野原、またある所では家の倒壊、見る物全てがあの美しい街、神戸とはほど遠かった。目にした者しか分からない、地震の恐ろしさ。ぼくは残念だった。あの大好きな街がこんな荒れ果てた広野になっていたなんて。

そしてボランティアをする場所に着いた。被災者の人達も顔が沈んでいた。全てを失ったんだろう。胸が痛む。

ぼくの仕事は豚汁をよそって渡す仕事だ。みんなおいしそうに食べていた。少しでも明るい顔が見れたらぼくはそれで嬉しい。心をこめて渡してあげた。「元気を出して。」うまく口では言えなかったけれどぼくはそう心から思った。今言えることだが、ボランティアというのは人と人とが触れ合える大切な場を作るものなのだ。活動することで神戸の人々の心がつながっていく。そんな気がするのだ。

帰り、ぼくらが後片付けを始めたら、2人の人がやって来て一緒に手伝ってくれた。最後に「ありがとう。」と言ってくれた。嬉しかった。「あなた達は被害にあまり遭っていないからいいけど私達は被害をうけているんだ、なにくそ！」などと思っていない。心から嬉んでくれた。ぼくは本当にボランティアをしてよかったと思う。

あれからかなり日が経つ。まだまだ復興していない。早くして欲しい。被災者の人達の声が聞こえる。近日、ぼくは壊れた家の前に花と水が供えてあるのを見た。どんな気持ちで供えているのだろう。やっぱり悲しくてつらい気持ちだったとぼくは思う。心の奥底ではまだあの日のことが忘れられないでいるのだ。被災者でないぼくは同じ神戸市民として、その気持ちが十分に分かる。死者5000人以上を出した阪神大震災、忘れるわけないだろう。そしてぼくもあの日のことを絶対に忘れたくない。

## 忘れてはならないこと

足立 敦子 (50回生)

驚いて飛び起きると、父がもう私の部屋に入ってきていて、向こうの部屋から母が「早くこっちにおいで!!」と叫んでいるのが聞こえた。豆電球をつけていたはずが、辺りは真っ暗で、足元の散乱物に気をつけながら父にくっついたまま、母のいる部屋へ行った。冬の早朝6時前。まだ寒くて、ふとんにくるまって母と抱き合っていた。周りは人形ケースの割れたガラスが散らばっていて、ひどい状況だった。

ようやく、余震も落ちつき、明るくなり出したところ、改めて家の中を見て信じられない思いがした。幸い、私の家族には傷ひとつ負った人はいなかったが、あの瞬間に本当に

たくさんの人の命が奪われたことが、後になってわかった。

親せきの人達は何日も泊まったり、父が水を車であちこちに運び回ったり、私の目の前で、想像もしなかった出来事が次から次へとどんどんくり広げられた。一度にたくさんの初体験をした。自然の恐さを心底思い知った気がした。なのにそれが最近になってすっかり、希薄になってきたように思う。あれだけ恐い思いをしたのに、いざ、自分の生活が戻ってくると、あっさりとそれを忘れてしまっている。1月17日からもう5か月が過ぎたが、今でも、不自由な生活を強いられている人がたくさんいることを決して忘れてはいけない。そして、あの日のこともしっかりと心に刻みつけておかなければならないと思う。

過ぎた出来事は日々疎くなる。けれど、多くの被災者が残っている限り、みんなが幸せな生活に戻らない限り、まだ終わってはいないということを忘れずにいたい。



## 震災後の私

石丸 奈都子 (50回生)

今回の阪神大震災で多くの人が亡くなり、また多くの人がケガをして改めて地震の恐ろしさを実感しました。私は地震というのはごくたまに小さな揺れがある程度であり地震が恐いなんで思っていませんでした。でも今回の地震は私の考えをはるかに越え、恐ろしいものでした。地震の直後私は家の中の飛びちったガラスの破片を見て死の恐怖を目のあたりに受けました。まだ15才の私にとって生死なんてものは本気で考えませんでした。それに2ヶ月後には大事な入試があったせいで私の頭の中は勉強、入試、それくらいのことしかありませんでした。まして自分以外の人の事など考えることもしませんでした。

でもその瞬間から私の考え方は一転して180度変わったといってもいいほど変わりました。どこがと言われてもはっきり説明することはまだ無理だけど、なんとなくただ毎日を経過するのではなく自分でいろいろ考え行動し、一日一日を大切に充実した時を過ごせるように生活していくことが一番大切だということです。今まではいつもとかわらない朝が必ずきて学校へ行き授業をうける。そして帰る家がある。それがあたりまえの生活としてばく然と時が流れていました。今考えると、その時自分が何も考えずただ過ごしてきた時間がとてももったいなく思われます。

今回の地震のように、いつ今の幸せな生活が崩れてしまうかわかりません。だから、私は今この時を精一杯生きていこうと思っています。

## 「平凡」の大切さ

上原 世津子 (50回生)

1995年1月17日、「阪神・淡路大震災。」この日付けと名前を、私は一生忘れる事ができないだろう。私の今までの15年間の中で最も怖かったものの1つで、あの瞬間私は初めて真剣に自分の死について考えた。

「死ぬという事は、ただ体と心が別々になるだけのことだ。」と考えていた自分はどこにもいなくて、ただ「死ぬ事が怖い。」とおびえている自分が布団の中にもぐっていた。この時家族全員が無事であるかどうか気がなりつつも、何もできず、まだ頭の中が『地震が起こっている』この事を十分に理解できていなかった。

強い揺れがおさまった時、まだ太陽の光もなく、すべてが変わり果てているなど考えもせず、「私は生きているの？」と真っ暗い部屋の中で考え、私に体があるかどうかさわってみた。「私は生きている！」この時命の大切さを実感した。そして父の声がどんなに心強かったことか……。両親の部屋の一番近くにある私の部屋に、すぐに駆け込んできてくれて、

「大丈夫か？どこも打ってないな？」と言って暗い部屋から連れ出してしてくれた。家はまだ揺れていて怖いはずなのに、家族の人と一緒にいると、なぜか揺れはじめていた頃よりずっと安心してた。父は私を連れ出してくれた後、ぱっとすぐ姉と妹それぞれの部屋に安全を確認に行った。

4時間程してやっと電気が通り、死者と倒壊した家の多さ、火災などの被害の大きさをテレビで知った。「この映像はどこ？」と思わせられる程ひどいものだった。しかし、それは夢でも何でも無い、神戸のありのままの姿だった。私の家の近くでは雪が降っていて、神戸の街が崩れているのが嘘のようだった。

私には六甲に住んでいた私のおじいさんの妹夫婦であるおじいさんとおばあさんがいた。私の親戚は家の遠い人が多く、その中で唯一身近で、私をかわいがってくれていたのだ。そのおじいさんとおばあさんの家がたった20秒間で倒れてしまい、その時は助かったものの、おじいさんはその後亡くなってしまった。

今、震災前とほとんど変わっていない我が家にいると、昔のようにもどれる気がするが、もう、おじいさんとおばあさんの家に行く事もできず、おじいさんと話をする事もできない。平凡な生活というのは、手に入れやすそうで、実はすごく手に入れにくい大切なものだとして初めて気付いた。

## 母

大谷 慎一 (50回生)

地震当日、空は赤かった。

1995年1月17日、兵庫県南部地震により神戸の街は瞬く間に死の炎に包まれた。長田区や中央区から起こった火災で舞い上がった煙や塵は空を覆い、光を遮り、青くなるはずだった空を不気味な紅色に染めた。

兵庫区内の自宅は1階部分が押し潰され、母と姉が2階部分の下敷きになった。2階にいた僕は窓から跳び降り、交番へ走った。そこに警察官の姿はなかった。交通整理をしていた警察官に目をとめて、無線で救急車を呼ぶ事を伝えて再び家へ戻った。家の前に立つと無数の「助けて」との声が聞こえた。その声の一つが姉のものであることがその時初めて分かった。レスキュー隊が到着したのはそれから2時間程たった後だった。それから間もなく姉は助け出されたが動揺と恐怖から顔は青ざめ、表情が全くなかった。それから何時間たっても母の声は聞こえてくることはなかった。今思うと母の最後の言葉は前日の晩に風邪気味だった僕に対して発した「病院行きよ」という一言だった。母の言葉はいつも優しさに溢れていた。そして、その最後の言葉も最高の優しさを僕に与えてくれた。

東京に単身赴任していた父が帰ってきたのは地震の翌日だった。倒壊した自宅と母の変わり果てた姿を見て父は一言だけ「悔しいな」と漏らして歪んだ両戸をたたいた。自分の建てた家で最愛の人を死なせてしまった自分を情けなく感じたのだろう。父が泣いた姿を見たのは、後にも先にも初めてだった。

僕自身の事について言わせてもらえば、母の事で最後に涙を流したのは地震から1週間もたっていない葬儀の時だった。1週間後には学校も再開され普段通りとは言えないまでも、学生としての大谷慎一の生活が始まった。進学を直前に控えた大切な時期に泣いてばかりはいられないというのが本音だった。悲しみを表に出そうとしない僕に違和感を抱いた人は少なくないはずだ。実際に数人の友人や先生から「悲しくないんか。なんでそんなに普通なんや。」みたいな事を問われた。悲しくないワケない。でも、悲しみを表に出す事によって得られるものは哀れみ以外の何でもない。その時の僕には哀れみなどというものは必要なかった。

高校進学と同時に母の事は完全に伏せてしまおうと思っていた。実際に母に関しての事実を知る人は僕自身の事を知る人の中でも一握りの人だと思う（この文を読むまでは）。しかし、僕が文集のために原稿を提供したのは哀れみを得ることが目的ではない。地震の恐怖や当事者の心境を後世に残すために、どんな形でもいいから少しでも力になればと思い協力したのだという事を理解しておいてもらいたい。

今思うのは、大切な人や愛する人を死なせたくない。自分の手で守りたいという事だ。母という人間を守れなかった分その思いは強く僕の中に根付いている。

母は、今の僕にとっては「母親」という存在だ。でも、10年たって結婚して僕自身が親になった時に「親」の先輩として母を見ることが出来ると思う。「子を持って知る親の恩」というやつだ。そして、母と同じ年（46才）になった時には一人の女性として母を見る事が出来ると思う。その時に初めて父の母に対する思いや、母の女性としての魅力が見えてくるのだと思う。

最後に、震災後に僕の精神的な支えとなってくれた友人をはじめとする方々に感謝したい。そして、今まで僕を一生懸命育ててくれた母に追悼の意を表したいと思う。

## 震災より学んだこと

川口 広未 (50回生)

17日の早朝、私も震源に少し外れた北区で激しい揺れによって目を覚ました。地震なんかテレビの向こう側の世界だという意識で育ってきた私にとって、初の地震体験だった。そして、恐怖で震えあがったのも初めてだった。

そんな恐ろしい体験とはうらはらに、北区に普段の生活が戻ってくるのは早かった。1週間後にはほぼ元通りで、余震に体を緊張させながらも学校に通えるようになった。しかし、テレビの中ではそうはいかなかった。そこには考えられない次元の話、例えば身内や友達が亡くなった、そんな話があった。震災から1週間というもの、私はそんなテレビをひたすらぼんやりと眺めていた。受験もなにもそんな気分ではなかった。けれど、もっともっと辛いことがあった人たちの様子がしだいに明確になるにつれて、自分が情けなくなっていた。ボランティアができるだけでなく、勉強をするでもなく、自分が一番中途半端だったことに気がついたからだ。

中学校の先生の中にも、長田の方に住んでいる人がいた。何度が行われた集会の中で、実感のこもった震災体験の話聞いた。その話の最後に、「君らは勉強できる状況にあって幸せだ。」とどの先生も口にした。私もそのときにその言葉の意味がよく伝わってきた。自分のできることを、一生懸命やろうと思った。

それからあつという間に受験を迎えた。受験の日、夢野台高校のグラウンドにあるテントを見た。入学してから、今も体育館にはフトンがしきつめられ、グラウンドにはテントがある。色濃く残る震災の爪跡が長田区の町の、どこにでも転っていた。そして今も普通の生活は、ここにはない。

これらの体験が私に伝えたこと、地震の怖さ、助け合いのすばらしさ、勉強ができる喜び。なにより普通の生活ができるありがたさを強く感じられたような気がする。

## 避難所生活を通して

川崎 真吾 (50回生)

僕は夢の中で自分が何かにぐるぐる回されるような感じがしたので、はっと目を覚ました。が、タンスの上にあった物にうもれて、しばらくは動けなかった。

それから何分もしないうちに、すさまじい爆音と振動が伝わった。すぐ下の階でガス爆発が起こったらしい。

なんとか自分の上に乗っていた物をどけて、まだ薄暗く、寒い部屋の中を見回した。今まで立っていた物がすべて倒れていて、床一面にガラスの破片が飛び散っていた。約10分後に2度目の爆発が起こり、それと同時に家から逃げ出た。

とりえず、近くの小学校に避難することになったのだが、すでに多くの人達が避難していた。半分ぐらいの人達は、パニック状態で、先生方も人数確認に四苦八苦されていた。

最初の夜、ひとつの教室に100人ぐらいの人から寝ることになったが、寒い廊下で寝る人も少なくなかった。

2日目、まともな食べ物がなく、おなかがすいた状態が続いた。いっこうに人は減らず、むしろ増えていった。

3日目、4日目もそんな日が続いた。

5日目、運よく友達の家では水が出るので、晩ごはんを作ってあげると僕の兄弟と友達ひとりをさそってくれた。僕達は喜んでごちそうになり、そこで友情の大切さと何よりも食べ物があることのありがたさを痛感した。

6日目、ようやく余震の数も減ってきたので家の様子を見に行っただ。以前は暗くてあまり見えなかったが、あらためて見ると、ただただすさまじいといかないような光景だった。とりあえず毛布や服を出せるだけ出し、避難所に戻った。

地震から1週間たった日、ひと組の老夫婦がやってきた。だが、おじいさんの方が、ひどく自分勝手だった。

夜中、少しの足音もよく響くような静けさの中を、突然大声でしゃべり出したり、早朝、まだみんなが寝ているのもおかまいなしに電気カミソリでひげそりを始めた。おばあさんは止めようとあれこれ小声で注意しても、少々ボケているらしく、あやふやに答えるばかりだった。

10日目、中学校で集会があった。幸いにもみんな無事だったが、家が燃えてしまった友達は多かった。

11日目、さらにおばあさんがひとり避難してきた。それがまたさっき出たおじいさんよりももっとわけがわからない人だった。僕達の隣りに荷物を置き、そのままどこかに行ってしまった。さっきのおじいさんは、周りの人達の注意によっていくらかは静かになっていた。夜中、ひょっこり帰ってきて何やらしていたが、僕達がトランプをしているのを見て、いきなり「私にかしてみなさい。」とか言って弟のトランプを取ってまじってきた。一応は普通にふるまっておいたが、それだけでは終わらなかった。

12日目、僕達家族は、いとこの家族と一緒に避難していたため、人数が多かった。そのおばあさんは、そこに目をつけたのか、「この荷物を見張っておいてね。」とひとこと言って、さっさとどこかに行ってしまった。僕らも家の中のかたづけや勉強などで忙しいというのに、あまりにも無責任だと不快に思った。

さらにその夜、そのおばあさんは帰ってきたが、礼の一言も言わずに、寝る用意をさせた。そもそも今寝ている所は以前避難していた人が、あとで来る人のためにとわざわざ残してくれた場所で、1人で寝るには十分すぎるほどのスペースがあったのに、さらに自分が使う場所を広げようとしていた。さすがに注意しておいたが、無意味だった。

1日たった14日目、そのおばあさんは、身の回りのものすべてを人まかせにした。自分の荷物はもちろん、自分がもらいに行くはずの救援物資を僕らに言いつけてさっさとどこかに行ってしまった。

その他にもいろいろと自分勝手なことをし放題だったので、周りの人みんなにあいそをつかさされた。もちろんほとんどが僕らにたのまれていたのでけいに不快感がたまっていた。

そして17日目、ついに僕達家族といとこの家族は家に戻ることができた。

しかしその後1週間と少しの間、同じ教室に避難していた人達に、ささやかながら、温かい紅茶とおかしをとどけてあげた。

もちろんまだ水とガスは出ていなくて、毎日の食事や洗濯もいつもの倍以上の時間がかかったけど、僕達と一緒に避難していた人達に、何かできることはないかと考えてのことだった。

やはり『困った時はお互い様』という言葉のとおり人は互いに助け合って生きていくものである。そして今、食べる物があって水があって電気やガスがあることが当たり前なのではなく、それがいかに大切に貴重なものであるかをあらためて痛感させられた17日間だった。

ちなみに今、僕の家族は、なんとか以前の生活ができつつある。それもこれもみんな周りの人達のおかげである。

僕は今、本当に幸せだ。

## 震災を通して学んだこと

河 南 理 絵 (50回生)

1月17日、この日は忘れたくても一生忘れられない日になるだろう……。

震災から5ヶ月たった今、あの時の激しい揺れを思い出すことは少なくなったけれど、震災直後は、余震にも敏感になり、毎日おびえて過ごしていました。震災から2週間ほどたったころ、長田から三ノ宮にかけての場所を見に行きましたが、やっぱりテレビで見た光景と自分の目で見た光景は全然違いました。まだ生々しさが残っていて、改めて震災の恐ろしさがこみ上げてきました。もう悲しみを通りこして、ただ呆然としていました。

すぐ目前に受験をひかえていた時期でしたが、勉強する気にもなれず、毎日テレビばかり見ていました。けれども、避難生活の中で受験勉強をしている人の話を聞いた時、自分がとても恥ずかしくなりました。被害も少なく、ちゃんと学校にも行っている私たちが頑張らないと被災者の人たちに申し訳ないと思いました。ボランティア活動にも、今すぐにでも参加したかったのですが、受験が終わるまで我慢しました。そして、受験後参加したボランティア活動では、人間の素晴らしい生命力を学んだような気がしました。避難生活をしている人は、とても強く震災なんかには少しも負けてはいませんでした。私は被災者のお世話をするために行ったのに、反対に被災者の方々から色々なことを教えてもらった気がします。

本当に突然起こった悪夢のような出来事。自然災害には逆らえないけれど、この震災を通して、何か自分の中で大きく変わったものがあると思います。今は、それが何かははっきりとは分かりませんが、きっとこれからの生活の中で役立っていくだろうと思います。

## 地震のあとで…

川本 さやか (50回生)

1月17日、私はすごい音とともに、自分がこわれるのではないかというぐらいの揺れが始まったとたん、目が覚めました。すごく怖かったです。冷や汗をかいていました。その後も何度か余震があり、その度に心臓がドキドキしました。

テレビで見ていると、長田の方は、もっとひどかったんだと思いました。ほとんどといっていいほどの家がかずれて、焼けていました。人が泣いていました。わたしには、ほんとのところをいって、かわいそうとしかいえませんでした。行動力もなく、ましてや自分で働いて、稼いでいるのではない、ただの中学3年の私には、被災地の人たちに、少ない募金をするしかできませんでした。それに、心のどこかで、わたしの家や家族はだいじょうぶでよかった、と自分中心にしか思ってなかったのかもしれない。

けれど、地震で私の住んでいる西区にも、それ相応の被害はありました。電気やガスはすぐに使えるようになったけど、“水”です。水がなかなか出ませんでした。トイレは、わざわざ、水をくみにいって流さないといけなし、お風呂にも入れませんでした。飲み水も、近所の家の井戸水ももらってきて、どうにかしていました。けれど、そんなことは、よく考えれば、被災にあわれた人には、まだましなのでしょう。やっぱりぜいたくだなと思います。

受験勉強は、おろそかになりがちでした。午前中授業であせってもしました。すごく不安でした。もともと集中力がないうえに、もっと気が散って、ほんとに今思えば、よく合格できたと思います。

今、私の生活は、落ちついています。通学の時に、撤去作業をたまに見かけます。それを見て、ああ地震のことなんて忘れかけていたなと思います。でも、これは忘れてはいけなし、心のすみっこにきつと残っていると思います。

この地震で私は、自分の情けなさをよく思い知らされました。1人の人間としての小ささを。だからもっと、人間として大きくなりたい。そう強く思いました。





## 心の支えだったもの

久保 多喜子 (50回生)

あの時から4ヶ月、思い起こせば、色々なことがあったな、と思います。私の家は兵庫区の湊川駅の近くにあります。半壊という判定を受けながらも、家の中の生活はほとんど震災前と同じに戻りました。

あの揺れの後、外が明るくなってから外に出て、周りを見回すと、すでに裏の木造住宅から火があがっていました。けれども、その時は、まさかあんなに沢山の死者が出て、火事が沢山起こって——なんて全く思いつきませんでした。

この震災で一番強く感じたのが、友達・知人・身内をはじめとする励ましてくれた人達の優しさです。特に、あんなに沢山死者が出たのに、私の友達・知人・身内が誰ひとりケガもなく、無事でいてくれたということがうれしかったです。実際、地震の被害を耳にした時は、「自分は本当に今生きているのか」と疑ったりしたこともありました。

私は地震の3日後の夕方から、三木市にある母の実家に避難しました。家が無事だったから自分の家にいたかったけれど、父が安心して市役所の仕事に打ち込むことが出来ないと分かり、三木に行きました。その決心がついたのも、心配していた友達の無事が確認出来て安心したからです。そして、その友達が被害がいく分かまじな垂水に行ってがんばる。と言ってくれたから、私も三木に行って受験勉強をがんばろう、と思いました。2月いっぱい私は三木市で三木市の中学に通いました。三木にいた時も、心の支えになってくれたのは神戸の友達との会話でした。大阪に引越した友達が大阪の高校に合格したと電話があって、私も絶対合格出来るようにがんばろう、と思ったし、沖縄の友達も、電話番号をわざと知らせないようにしていたのに、「104」の案内で調べて、避難先の三木にまで電話をして心配してくれたことも、私はとてもうれしかったです。普段何気なく接していた友達が、こんなに心の支えになっていたとは全然気づきませんでした。本当にみんな無事で良かったです。

## 複雑な思い

小貫 芳美 (50回生)

あの時の地震が4ヶ月たった今でも神戸の街に大きな影響を与えている。私にとっても忘れられない、忘れてはならないことだと思っている。いったいどのくらい時がたてば、新しい神戸に生まれ変わるのだろうか…。

受験生の私にとって、中学生生活最後の3学期が始まって、勉強もし、思い出もつくり…と毎日がとても忙しかった。あの日は、中学校最後の思い出として、先生方が計画して下さった球技大会が行われる予定だった。とても残念だったけれど中止。学校も1週間ほど休みだったけれど、その間ろくに勉強なんかできなかった。知り合いの人などからの電話が何回もかかってきて、心配してかけてくれたのがとてもうれしかった。テレビでは街の様子が報道され、外ではヘリコプター、救急車の音がひっきりなしに聞こえてくるのでなんだか余計に怖くなって、何もする気がおこらなかった。父の会社の側が焼けているのを

テレビで知り、父は「あかんかもしれへん。」と何度も言った。その言葉がぐっときたがあまり言葉に出さないようにした。どうか焼けないでほしいと願った。とにかく、書ききれないほどの心にしみたことがあった。幸い住んでいるところは北区だったのでよかったものの、親しみのある神戸から明りが消えたのを見、家や家族を失った人を見ると涙がでそうになった。でも、今街に出ると逆に励まされる。人間っていうのは、強いもんだなぁと思う。5000人以上の人々が命を失ったけれど、その人達のためにもやっぱりもとの神戸に戻らなければならない。これからの神戸をつくっていくのは、私達の世代だと思う。人間として未熟ながらも体験した阪神大震災に精神的にとても大きなものを与えられたような気がする。人々の輪があり、協力し合い、励まし合って「生きていく」ことを互いに感じることは、つい最近まで人間が忘れかけていたことなのかもしれないと思う。

1月17日、ひとりひとりが複雑な思いで朝をむかえた。神戸は一瞬とても暗い街となった。けれど何年後、きっとすばらしい街になっていることだろう！

## 地 震

園 貴世子 (50回生)

あの日以来、眠れない日々が続く  
赤く光るあの日の空が忘れられない  
暗闇に響くラジオの声  
不安そうなみんなの目

あの日から4ヶ月余りが過ぎた  
すっかり変わってしまった風景に思わず足を止め  
込み上げてくる切ない思いに歯をくいしばる  
いつかは景色も元どおりになるだろう  
でも、あの日の事は一生忘れられない  
忘れてはいけない

あの日弟と神戸の町を歩いた  
「これって夢やんなあ？」  
とつぶやいた弟の横顔が忘れられない  
私は、つないでいた手を強くにぎってやることしかできなかった

この震災の中で一番うれしかった事  
久しぶりに学校で会った友達と  
「あんた、生きとったん？」  
と言いながら笑いあえた事